

金融商品の選び方・金融商品広告の注意点<第1回>

金利で生活する ライフプランは可能だろうか？

まとまったお金をどこに預けるか

いきなりですが、次のシチュエーション、どこがおかしいでしょうか？

「1000万円の当面使わないお金

(間違いその①)

どこに預けよう (その②③)

いつもの△□銀行に行つて

相談しよう (その④)

元本確保の利回り5%、

これ良さそうだ (その⑤)」「

◆間違いその①

「当面」

当面とはいつまででしょうか？ ずっとではないのですよね？ 本当は何かに使いたいと言う希望があるのではないのでしょうか？

◆間違いその②

「△□」



竹本 隆之

ライブリッド・プランニング代表

【たけもと たかゆき】独立系FP「ファイナンシャルプランナーに相談.com」を開設。会社員と主婦を対象に、ライフプランの相談や「人生とお金・人生の質」についてセミナー。老後設計・投資信託・相続分野に強い。物理系エンジニアでもある。

今あなたは商品を「買おう」と思っています。例えば、あなたは洋服を買う時に店屋から選びますか？ そうではありませぬ、まずどんな洋服を買うのか考えますよね。

◆間違いその③

「預ける」

こう思った段階で、元本割れのことを半分抜け落ちていきます。リスクがあるからリターンがある、頭で分かっているてもリスクを過小評価しがちなのです。悪いことは言いません、「預ける」つもりなら定期預金にしてください。

◆間違いその④

その②と同じく、「お店」から選ぶのはあまりよろしくありません。まずは金融商品を知ることからです。そして自分の選んだ商品はどこで取り扱っているのかを考えましょう。

◆間違いその⑤

先に質問です、次のうち元本割れしな

いのはどれでしょうか？

「元本保証・元本確保・元本保全」。

答えは元本保証です。

よく似た名称は畏です、畏。

金融商品はあくまでも「商品」です。ですから、販売側は売上げを増やしたい、と常に思っています。売上げとは「手数料」です。これを意識してください（金融商品の手数料、およびリスクについては本文の中で説明していきます）。

金融商品を「買う前に」

金融商品を選ぶ際のポイントは、「安全性（リスク）」「流動性（換金のし易さ）」「収益性（利回り）」などと書かれている本が多く、この三つを勘案しながら余裕資金でおこないましょう、と書かれています。

これらは全く正しいのですが、それ以前の段階で実に多くの方がお金に対して間違ってしまうています。どのような所で間違っているのか、そのポイントを紹介いたします。

ポイント1 「すべて使わなうお金」と、「余裕資金」は違う

例えば、定年退職時に二〇〇〇万円の貯蓄があったとします。「このうち半分は手元に残し、残りの一〇〇〇万円で投

資信託を買おう、これが一〇〇万円の利益を生み出せば海外旅行に行くぞ」、「こんな考えで元手を半分減らした人、結構多いのです。例のサブプライムローン問題です。

確かに一〇〇〇万円はすぐに使わないお金です、しかしこれは余裕資金とは異なります。旅行に行かなくても構わないという考えであれば問題ありません。でも「絶対旅行したい！」と思うのであれば費用一〇〇万円を取って余裕資金は一〇〇〇万円ではなく九〇〇万円。もしこれが海外でなくても良いから「せめて国内旅行」だと計画するのならば五〇万円。すぐに使わなうお金が一〇〇〇万円と同じであっても、余裕資金はそれぞれの計画によって違うのです。何も旅行計画とは限りません。例えば、

「一〇年後に家を建て替えるぞ！」こんな方は、「最低2LDK」などと思うのなら、その分は確保した上で残りの余裕資金を運用すればひよっとしたら2LDKが5LDKに変わるかも知れません。すぐに使わなうからと、まとめてどこかに置いておくという考えでは、大きな損失を出してしまうもおおかしありません。

ポイント2 リスクがあるから、リターン（利回り）がある

単純に利回り1%と利回り10%で

は、高いリスクを持っているのはどちらでしょうか？ 金融商品の原則では、利回りの高い方がリスクも高いのです。でもこんな会話を聞きました。ある銀行窓口での会話です。

「投資信託ですか？ 一口に投資信託と申ししても、リスクの高いものから低いものまでいろいろ御座いますが、すでに何かお考えでしょうか？」

「うーん、リスクは低くてリターンの高いものがないなあ」

（そんなものがあるのなら私も知りたいぞ、なんて思っていると…）

「（パンフレットを取り出して）これなんか最近皆様からよくお選び頂いていて好評で御座います。」

流石です。

いくつかのパンフレットを手にするとうしても過去の実績や利回りの方に目がいきます。販売員は「どれだけ損しても構いませんか」とは聞いてきません。どんなリスクがどれくらい潜んでいるのか、リスクとリターンの両方をしっかり把握した上で、最後は自己責任の判断が求められるのです。

ポイント3 手数料と税金が、利回りを下げる

不動産投資用マンションを買っても、

図表 1 公定歩合と消費者物価指数(前年比)の推移



【出典】日本銀行・公定歩合（基準割引率および基準貸付利率）データ。総務省・「消費者物価」消費者物価指数より月次データを前年比で換算。

最初に仲介手数料などというコストが発生します。ほとんどの金融商品も同じです。投資信託も年金保険も販売手数料に相当するものがありますし、保有している間も年間数パーセントのコストがかかります。それに数年間は解約できない、あるいは、期限前解約時には一定の手料を払う、というものがほとんどです。つまり、運用以前の段階で手数料がかかります。ですから最初の時点では元本割れをしています。それを時間を掛けてコスト以上に運用ができてはじめて収益

が出る、この点は是非記憶に留めておいてください。

次に税金、これについても注意が必要です。多くの方が儲けに一割二割の税金が掛かることに無頓着です。「儲かったのだから税金払うのは仕方ない」、このように考えがちですが税金への考慮をしないか、一〇年後二〇年後には保有資産の総額が大きな違いになって現れてきます。

手数料（コスト）と税金、これは是非意識して頂きたい項目です。

毎月一五万円の金利生活をするためには

年金とか給料とか以外に、もし毎月一五万円の金利収入があれば、生活はかなり楽になります。毎月一五万円ということは一八〇万円。金利五%で運用できるとしたら、三六〇〇万円の資金があればこれが可能になりますね。

一九九二年（平成三年）頃の定期預金の金利は六%でした、もつと昔は九%の時代もありました（公定歩合と消費者物価指数を図表1に示します）。昔は、定期預金というリスクのほとんど無い金融商品で金利生活が可能だったので。

今は毎月一五万円の金利収入など望むべくもなく、年金の手取額も一〇年前二〇年前とは随分状況が異なってきていま

すから老後の生活設計は綿密にしなければなりません。そして資産をリスク資産で運用をするつもりなら、そのリスクとリターンをしっかりと把握しないとうまくいきません。まずは自分自身の許容リスクを知り、その上で金利収入を目指した運用を行う姿勢が必要です。

でも一口にリスクと言ってもいろいろな種類があります（図A）。

「元本割れリスク」と総称されますが、その内容は実に様々で、例えば、為替や株式のように価格が変動するリスク、企業が破綻するリスク、ある国で戦争や暴動が起こって経済が混乱するカントリーリスク、満期前に解約する場合に手数料が差し引かれる解約リスクなどなどです。

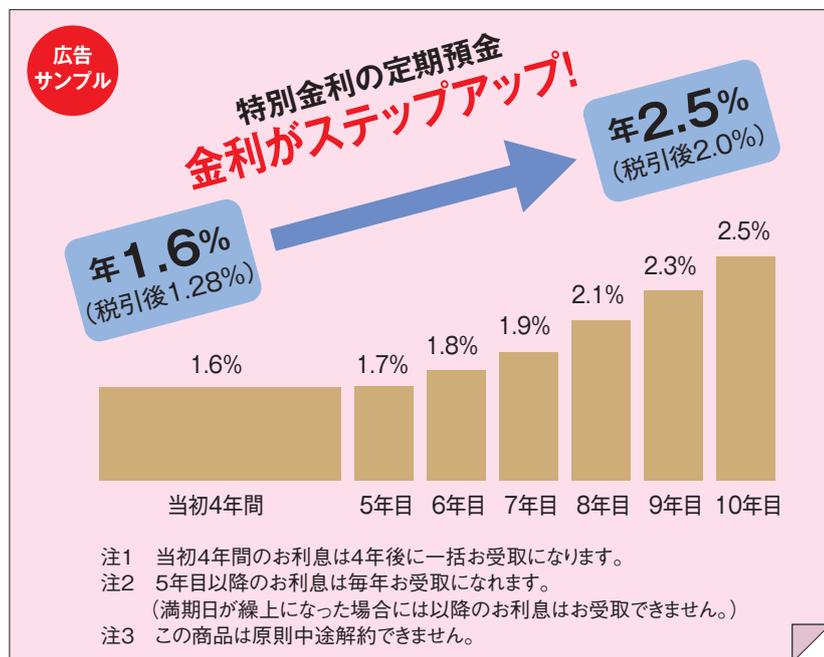
図A

リスクの種類

- 価格変動リスク
- 信用（破綻）リスク
- 為替リスク
- カントリーリスク
- 解約リスク
- ⋮

現在の金融商品販売法や取引法では、リスクに関する説明義務が販売する側に課せられています。すなわち、元本割れが生ずる恐れのある商品は「元本割れすることがあること」と、それがどんな要因で起こるのかを説明する義務があるのです。しかし、銀行や証券会社などの

図表2 満期日繰上げ特約付き定期預金の例



販売窓口でこれらリスクの一つ一つを、から十まで説明するとなると経済学部の一授業ではありませんから必要最小限の一般的な説明に留まってしまうのは仕方ないことでもあります。ですが、損した時に降りかかってくるのは自分です、繰り返しますが自己責任。疑問のある場合は必ず販売業者に質問してみましょう。

一般的に定期預金にお金を預ける時は金利をチェックします、期間が長いほど金利が良いことが多いです。その代わり満期前引き出しは普通預金の金利（ほぼ

ゼロの金利)になります。

利回りが高い商品の場合、中途解約では違約金とか解約金という名目で手数料を負担することがよくあります。定期預金とは異なりますから、特に、このような「解約リスク」については注意してください。

◆円定期預金 (満期日繰上げ特約付き定期預金)

図表2を見てください。この商品は、期間は最低四年〜最長一〇年（銀行側の都合で繰上満期）

・利息（金利）が年数毎にアップ
こんな商品で、利息（金利）がかなり良い商品です。仕組預金の一種で、預ける側は有利な利息を貰う代わりに、満期日の期日を四年から一〇年の範囲で銀行側が決めても良いという条件になっています。これの最大のリスクは「解約リスク」です。原則、中途払い出しできません。二番目が繰上満期のリスク。思っていた利息が手に入らないというリスクです。

解約リスクがなぜ最大のリスクになるかという点、銀行側の一〇年と預ける側の一〇年では微妙に違うからです。「突然脳梗塞で倒れた、家をバリアフリーに改造したい」「引越す必要ができた」「親が有料老人ホームに入ることになって資金が必要になった」「家が災害にあった」

などなど、ライフプランを考えた場合には思わぬ事が起こってそれは高齢になるほど確率が高くなる。これが銀行側の一〇年とは違うところなんです。

原則中途払い出し出来ませんが、特別の事情により解約に応じてくれる場合もあるようです。が、その場合でも、数%〜十数%の損害金・違約金を払うことになっていきます。

解約リスク以外の他のリスクどうかと見てみると、これは外国通貨ではありませんから為替変動リスクなどはありません。図中には表示していませんが、預金保険機構の範囲内の商品です。ですから他の口座と合わせて一〇〇〇万円までの「破綻リスク」には耐えられる商品です。

このように金融商品を選ぶ時はリスクを一つ一つ判断していくことを心掛けたいものです。決して利回りの表示だけでは判断しないでください。高利回りであるほど何かしらのリスクがあるはずなのです。

外貨預金

外国為替と言えば筆頭は何と言っても米ドルです。現在はゼロ金利政策に近いアメリカ経済ですが数年前までは五〜六%の政策金利でありました。すなわち、一年で一〇〇ドルが一〇五ドルになったという事で、為替相場を考慮しなければ収益が出ました。また外貨預金は単純

図表3 円とドルの為替レート推移



【出典】日本銀行、時系列統計データ検索より外国為替市場（各種マーケット関連統計）から、東京市場ドル・円スポット中心相場 / 月中平均を表示。

に「ドル一〇〇円でドルを買い、一三〇円の時に売れば約三割の収益になります。逆なら損失になる、そういう「商品」であります。図表3に円とドルの過去の為替推移を示します。

ポイントとしては次のようなものがあります。

- ◆相場（レート＝商品価格）
- ◆金利（利息）
- ◆手数料（コスト）
- ◆経済情勢

注意点は手数料です。ドル一〇〇円という相場（通常中値・仲値と言う）であつてもドルを買うのか売るのでレートが違います。よく往復二円と言われるのですが、相場の中値に対して、例えば一円ずつコストがかかるようなレートになっています。TTSレート・TTBレートと呼んでいます。

これから円高になるか円安になるか、こういった経済情勢に対する相場観というのも重要ポイントの一つですね。

では、広告の例を見てみましょう。外貨預金のこの「広告」はいかがでしょうか（図表4）。お得なものでしょうか、それともあまりお得なものじゃないでしょうか？

これを見て瞬時に、「相場が変わらないなら損になる」と思えばあなたは上級者です。くれぐれも、

「金利二%は日本円より良いし為替リスクはあまり分らないけど円高にもなりそうにないし、とりあえず一〇〇万円持つて預けよう」

などと思つてはいけません。細かい計算は後で書くとして、この広告を見るかと言いますと、

- ① 一ドル一〇〇円で往復二円の手数料
↓手数料は約二%
- ② 利息金利二%・税金は二〇%。

↓税引き後の利息は一・六%

相場が変わらないなら、②から①を引くと約〇・四%損をする。

一応細かい計算をしておきますと、一〇〇万円で買えるドルは九九〇一ドル。一年後にはこれに二%の利息で税金が二割ですから実際の利息は一・六%です。一五九ドルの利息、元金と合わせて一〇〇五九ドル。これを一ドル九九九円で日本円に換えると九九万五八四二円です。（小数点以下省略）

では次にこれはいかがでしょうか（図表5）。よく「外貨預金キャンペーン実施中」などと宣伝されているものです。先ほどのものより有利なんでしょうか？

六%が一ヶ月間というのは、年率六%の利息を一カ月間だけつけるという意味で、二カ月で割つて一カ月掛けた利息つまり、〇・五%の利息ということ。キャンペーン中ですから最初だけが有利な金利となっているわけで二カ月目以降は通常金利で、この金利は大抵非常に低い金利になっています。

ではこれ、一カ月後にはいくらの「円」になるでしょうか？ 先ほどと同じように計算しますと、日本円に換えると九八万四一五九円。大きく元本割れです。広告の表面金利だけで判断してはいけないことが分かりますね。

ご存じのように外国為替には米ドル以

図表 4

広告 サンプル

外貨定期預金 米ドル
金利2% (税引前)
(期間1年)

実際には
為替相場が変わらない時
1ドル=100円の場合
(TTS=101円、TTB=99円の場合)

**100万円を預けると
4,159円元本割れする**

図表 5

広告 サンプル

外貨定期預金 米ドル
優遇金利6% (税引前)
(期間1カ月)

上記金利はキャンペーン期間中の当初の金利であり、
終了後は通常金利になります。

実際には
為替相場が変わらない時
1ドル=100円の場合
(TTS=101円、TTB=99円の場合)

**100万円を預けると
15,841円元本割れする**

外いろいろな通貨があります。あまり聞き慣れない通貨では相対的に手数料は高くなっていますので金利だけに目をとらわれずに円↓外貨↓円にかかるコストや、もちろん為替相場の変動は一番のリスクですし、他のリスク、すなわち、破綻リスクや、またカントリーリスクなども考慮したいものです。

また、外貨関係の金融商品では通常の外貨預金とは異なる「外貨MMF」という商品もあります。手数料が比較的安いというのが特徴で、為替差益に税金が掛からないことも特徴です（通常の外貨預金は為替差益に税金が掛かります。ただし逆に外貨MMFは為替差損でも通算で

きません。）。
このような商品もあるということには覚えておいた方が良いと思います。

**リスクの分散は
時間分散も大切**

リスク分散のために、一つの金融商品に偏らせずにいろいろなものに投資してリスクを分散させましょう、と書かれている本が多いように思います。これは確かにそうなのですが、昨年のサブプライムローン問題を見ていると、リスク（特に価格変動リスク）を持つ金融商品の実に多くの種類のもが大きくその価値を

下げることになりました。株式も債券も不動産もそれも国によらず、であります。ですからリスク分散では、「いつ買うか、分けて買うか」ということも重要です。

投資期間には五年間、一〇年間などそれぞれの人いろいろな期間があるわけですが、こういう期間のうちでリスク分散させようと思うと、やはり年オーダーで買う時期を分散させるということになります。

やはり価格変動リスクがあるものは、それなりの経験、それも時間的な経験が必要だと思えますし、それをなくして、一度にいきなり多額のお金をリスク資産に回すことはお薦めしにくいものです。ですから私は現役時代に少額（例えば一〇万円）でいいから何か始めなさいと薦めています。

少額から始めて、なぜリターンが出たのか、逆になぜ損をしたのかこれを実際に肌で感じた上で運用するという姿勢が必要だと思えます。

「金融商品の買い時は、あなたがまとまった資金を用意したタイミングとは一致しない」ということは是非理解して頂きたいと思えます。

次回は、ここ数年かなり人気が高まった投資信託と変額年金保険を取りあげる予定にしています。

※文中で取り上げた広告サンプル(図表2・4・5)は架空のもです。